



【2018/10/31 Release】

- | | |
|-----------------|----------|
| 01. それぞれ | 作曲：山川恵津子 |
| 02. 涙をいっぱい目にためて | 作曲：都志見隆 |
| 03. ユメサライ | 作曲：山川恵津子 |
| 04. 漂流夜行 | 作曲：都志見隆 |
| 05. また、空が近い | 作曲：山川恵津子 |
| 06. 足跡 | 作曲：都志見隆 |
| 07. 涙よ涙 | 作曲：野上朝生 |
| 08. 偽証 | 作曲：都志見隆 |
| 09. 鞆と時計 | 作曲：Chage |
| 10. ビニールの傘 | 作曲：山川恵津子 |
| 11. いまはこのまま | 作曲：山川恵津子 |

全作詞：松井五郎 全編曲：山川恵津子

森川美穂の歌手活動活発化計画は、2015年に決意し、2016年にアクセルを踏み込み走り始めました。行動を起こしますと必ず人と人が出会います。「My Dear」のレコーディングで山川恵津子さんと再会し、山川さんのセッティングにより、松井五郎さんと出会いました。こうして森川美穂は、新しい世界への切符を手に入れ、一歩、また一歩と、歌を旅して行きます。

作詞家 松井五郎さんをプロデューサーに迎えて生まれた11編の女性の物語。「それぞれ」「ユメサライ」「ビニールの傘」の3曲は、すでに2017年の春には楽曲として完成していました。森川美穂は歌いながら作品を育てていきました。ライブで歌うたびに変わる解釈、表現、空気感。こうして、森川美穂の中で作品と向き合い、歌うたびに作品は森川美穂の血となり肉となっていきました。

2017年の冬から、2018年の春にかけて、松井五郎さんとの作戦会議は続きました。山川恵津子さんのメロディーはさらに新しく2曲が生まれ、すでに5作品となっていました。森川美穂の歌謡曲は具体的な作品となっていきました。しかし、アルバムにするには、もっとバリエーションが欲しい。

「都志見隆のメロディーが美穂ちゃんにあうと思うのですが、西嶋さんはどう思いますか？」
「森川に合うと思います。書いていただくことが可能であればですが」
「では、僕が声かけてみますね」

森川美穂に都志見隆メロディーは合うと感じている。自分が作詞するかどうかの問題ではなく、その歌を聴いてみたい。自分が書かないとしても、僕は都志見さんを、森川さんへ紹介したい。

打ち合わせの席で五郎さんはこんな風に語っていました。“これだ。この感覚が欲しい!” と思いました。松井五郎さんは、作家としてはもちろん一流のプロです。しかし、音楽が大好きという精神はアマチュア時代のままです。私たちが青春時代に、感動し、没頭した、それが音楽だとすると、その気持ちがずっとそのまま今も続いている。そういう意味で、偉大なアマチュアリズムを持ったまま、作品作りを続けています。アマチュア精神をもちづづけている超一流のプロという存在が、松井五郎さんという人なのだと思います。

私は、松井五郎さんと打ち合わせすることが、楽しくて仕方がありませんでした。いつも、新しい気づきをもらえるからです。森川美穂への新しい視点が、打ち合わせの度に増えていきます。上から、横から、後ろから、だけの視点ではなく、何と言いますか、、、森川美穂そのものをプリズムのように感じているのではないのでしょうか？彼女の歌心をプリズムだとすれば、メロディーと言葉は光となり、反射、屈折、分散し、虹色のように歌声を引き出すこともできるかもしれません。どんな反射が起こるかは、光を当ててみないとわかりません。

そこから生まれる歌声が、結果として“今の森川美穂”そのものである。そんな風に捉えているのではないか？・・・などと、いつも打ち合わせを終えて、電車で帰る道の中の頭の中は、新しい発見と思考実験を繰り返す楽しい時間となりました。

このような打ち合わせを重ねているある日、思いがけないことが起こりました。

「西嶋さん、ぼくが美穂ちゃんのプロデュースしてみてもいいですか？」
「本当ですか？ お願いできるなら、すごくうれしいです。よろしくお願いします」

チャンスは熱いうちに掴まないとなりません。ありえない事象が目の前で起きた時、え？と気を失ってしまうと、あっという間に通り過ぎて消えてしまいます。とにかく全力でキャッチしないとなりません。

そもそもプロデュース依頼をこちらからお願いしても、そう簡単に受けていただけるものではありません。ただでさえ、年間、100曲の作詞を手がけ、さらに小説を書いたり、舞台作品を作ったり、コンサートプロデュースをしたり、一体、いつ寝ているのか？というような方です。

昨年末(2021年12月)に、沢田知可子さんの歌と音無美紀子さんの朗読での舞台作品「時がめぐるなら～あの頃へのラブレター」というライブを見ましたが、この、台本、演出、は松井五郎さんです。この中で、歌われている洋楽曲の日本語訳詞も全て松井五郎さんです。一体、どうなっているのでしょうか？松井五郎さんのエネルギーはどこから湧き上がってくるのでしょうか？

素晴らしい歌、素晴らしい朗読、素晴らしいコトバ。素晴らしい総合作品でした。感動しました。感動することが少なくなっていたので、自然と感情が揺り動かされ、感動しているという体験は、本当に、なんとも言えない感覚でした。感動しながら、なんだか、感謝していました。何に感謝していたんだろう？と、今、書きながら思いました。

また、横道にそれました。

このように多岐にわたる活動をしている松井五郎さんが、アルバムのレコーディングという、作業だけでも1ヶ月以上かかる時間を捻出し、森川美穂のCD制作プロデュースをしてくれるというのです。もちろん、考える時間、さらに、楽曲発注、判断、作詞、までを含めると、2~3ヶ月継続的に、いつも頭の中で考え続けねえなりません。CD制作プロデュースというのは、とてつもないエネルギーがないと出来るものではありません。

私は、一体、何が起こったのか?と思いました。これは、森川美穂が引き寄せたわけです。あの歌への一途な情熱を五郎さんが受け止めてくれたのでしょう。

私は、脇で眺めているだけで、後は五郎さんが全部やってくれるのです。それも、森川美穂を新しい歌の世界へ連れていくチケットまで用意してあるのです。森川美穂は、十分に持ち合わせている「気合」だけを鞘につめて、あとは列車へ乗り込むだけです。

人と人との出会いには、どうもタイミングが決まっているようです。近くにいても、出会わないこともあります。松井五郎さんは、ヤマハのポップコンにバンドでエントリーしてしまして、その後、1981年に CHAGE & ASKA の「熱風」で作詞家デビューをします。

森川さんがデビューした1985年当時、エピキュラスというスタジオで、私もよく森川美穂のレコーディングをしていました。もちろん隣のスタジオでは、ヤマハの他のアーティストがレコーディングしていました。CHAGE & ASKA もそうです。きっとスタジオで二人は度々、すれ違っていた事でしょう。きっとこの二人はスタジオですれ違っても、互いに認識していなかった。レコーディングプロデューサーたちも、みんな顔見知りです。普通なら、二人を紹介したりしてもおかしくありません。しかし、まだ、あなたたちは出会わなくていいよと、目隠しをしながら、会わないようになっていたのかもしれない。

こうして森川美穂は、デビューから30年以上の人生経験を積み、一番いいタイミングで、松井五郎さんと出会いました。振り返ってみると、点と点は線となり、現在地まで歩いてきた道となっていたのだと知ります。想像さえしなかった事が、打ち合わせの一言から一瞬に現実になり、そこからあっという間に、作品が増えていき、レコーディングが進み、森川美穂の新しい世界が溢れ出す作品集がリリースされました。

松井五郎さんがプロデュースして生まれた作品は、11編の女性の物語として「female」に収められました。そして12編目の物語が、森川美穂の人生の中に編み込まれていきます。



松井五郎プロデュースAlbum
「female」 Music Video

<https://youtu.be/BBTEyRNe8Ck>
<https://youtu.be/dCVh70dha-Q>

あなたがここにいる・・・11編の女性の物語



次回は、2019年11月リリースアルバム

「another Face ~ tribut to Goro Matsui + Koji Tamaki ~」についてレポートします。